みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

「中世」西アフリカにおける国家の起源：生態資源、交易、考古学 (生態資源と権力)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-03-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 竹沢, 尚一郎 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00008410

「中世」西アフリカにおける国家の起源

生態資源、交易、考古学

竹沢尚一郎

本稿は、考古学および民族学的なデータを用いて、「中世」[1]西アフリカにおける国家の発生過程を論じることにある。なぜこのような課題に、このような観点から取り組むのか。私自身の学的経歴について明らかにすることで、その理由を説明しておこう。

私は一九八一年から十数年間、西アフリカのニジェール川の漁民社会で民族学的研究を行ってきた。それは、ボゾと呼ばれる人びとの生業や宗教システム、社会生活の基本構造とその変化を、彼らの世界システムへの統合過程における適合や再編成として描く試みであった［竹沢　一九八九、一九九七、一九九九a］。私にとって、現在を理解することは、過去の再構成を抜きにしては不可能なものである。[2]それゆえこの時期の私の研究は、歴史的要素を取り込んだ民族学的研究というべきものであった。

その後、私は一九九八年から西アフリカのマリ共和国で考古学的発掘調査を実施してきた。私が研究方法を変更した理由は、以下の点にある。一般に無文字社会であった西アフリカの歴史を記述する上で、最も基礎的な資料となってきたのは、八～十六世紀に書かれたアラブの地誌家や歴史家の記述であり、[3]十五世紀以降はヨーロッパ人交易者や植民地行政官が書いた記録であった。これらの記録のほとんどは、短期間のみ西アフリカに滞在し

た商人や行政官の語りをもとにして書かれたものであるため、多くの限界を含んでいるのは明らかである。たとえばそれらは、外部の人びとが直接に関与していた長距離交易やイスラーム化の進展といった外在的要因を重視し、そこに西アフリカ諸社会の変化や発展の理由を求める傾向がある。いいかえるならそれらは、西アフリカの諸社会の歴史的変遷を、内在的発展としてではなく、外在的要因に帰して説明する傾向があるのである。

私が西アフリカで考古学調査を始めたのは、外部の視点によるのではなく、内在的な視点から西アフリカ史記述の可能性を探ることが必要だと考えたためであった。民族学的手法のひとつである口頭伝承の研究は、時間を深くさかのぼることは不可能だし、たえず話者の現在の視点からの再解釈を含んでいることや、絶対年代を同定

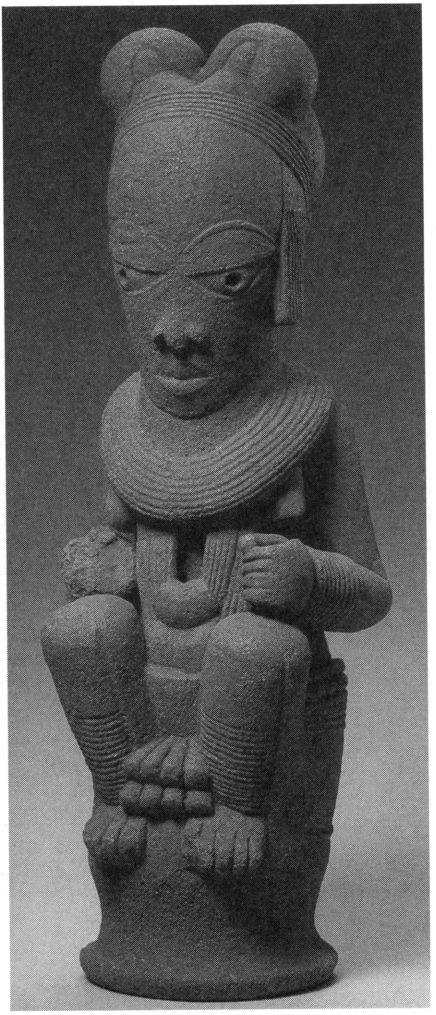

写真1　ノクのテラコッタ像

することが不可能であることなど、歴史の再構成の上でいくつかの困難を抱えている。[4] それゆえ、一般に無文字社会であった西アフリカの過去を再構成するには、口頭伝承以外の手法を開発するとともに、複数の方法を組み合わせて複合的に研究していくことが必要なのである。

なぜ、内在的な視点を開発することが必要なのか。紙面の関係から一例のみ指摘することにしよう。これまでの考古学的な調査研究によって、ナイジェリアのノクから、ニジェール北部のブナ、マリ中部の内陸三角州にいたる約二〇〇〇キロメートルに及ぶ広大な地域で、特徴あるテラコッタ像が発見されている。これらのテラコッタ像は、およそBC五世紀からAD十世紀にかけて作られたものであり、形態上の類似性のみならず、内部に火を通すために大きな開口部を設けていること、強度を増すために粘土に鉱石の粉末を混ぜていることなど、製造方法の点でも大きな親縁性をもっている（写真1）。しかも大量に発見されていること、それもしばしば墓所で発見されていることなどの点からも、当該諸社会において大きな社会的・宗教的重要性をもっていたことは疑いない。しかしながら、アラブ資料であれ西洋の話者であれ、外部の史料がこれに言及した例は皆無なのである。この例をひとつとっても、考古学資料の活用は西アフリカ史の正確な記述のためには不可欠なのである。これまできわめて限られていた西アフリカにおける考古学研究を推進することは、私たちに課せられた課題ということができる。[5]

以上の観点に立って、本稿は私および他の研究者による考古学調査の成果を通じて、西アフリカの過去の再構成を行うものである。それに加えてそれは、民族学的資料から出発して過去へと遡及することを通じて、七世紀から十六世紀にかけての「中世」西アフリカ[6]における国家の発生と発展を議論することを目的としている。その意味で本稿は、歴史民族学的な研究ということができる。

一　サバンナの生態資源の豊かさ

私が民族学的調査を行ってきたのは、マリ共和国中央部の「ニジェール川内陸三角州」と呼ばれる地域である。西アフリカはサハラ砂漠から南に向かって、年間降水量が三〇〇～五〇〇ミリメートル程度のサヘル（図のステップ）、五〇〇～一〇〇〇ミリメートル程度の乾燥サバンナ、一〇〇〇～二〇〇〇ミリメートル程度の湿潤サバンナ、そしてギニア湾岸に近い熱帯雨林地帯というぐあいに、東西に伸びる帯状の気候帯と植生が重なっている（図1）。こうした異質な気候帯と植生を結び合わせているのが、西アフリカの諸文明の母であるニジェール川である。ニジェール川はギニア湾に近いフータ・ジャロン山地から始まり、一路砂漠に向かって北東の方向に流れ、やがてトンブクツー付近に達すると大きく湾曲して南東に向かい、ナイジェリアでギニア湾に注ぎ込んでいる。ニジェール川は全長四五〇〇キロメートルと、アフリカ第三の河川であるが、高低差は一〇〇〇メートルに満たない。そのため、ゆっくりと流れるその水は各地に広大な氾濫域を形成して、西アフリカの諸社会の生業と社会制度の発展に大きく貢献してきた。

そのなかでも最も広大な氾濫域が、私が調査を行ったニジェール川内陸三角州である（図1のニジェール川とバニ川の合流地点付近）。上流に降った雨がこの地域に達する九月から十二月にかけて、幅一〇〇キロメートル、長さ一五〇キロメートルという広大な地域が氾濫水によって覆われる（その広がりは九州とほぼ同じであるが、近年のあいつぐ旱魃とダムの建設によってその範囲は減少している）。一般に西アフリカのサバンナ地帯は生態資源の多様性と豊かさをもっており、そのことは、この地でさまざまな作物が栽培化されたと多くの研究者が考えてい

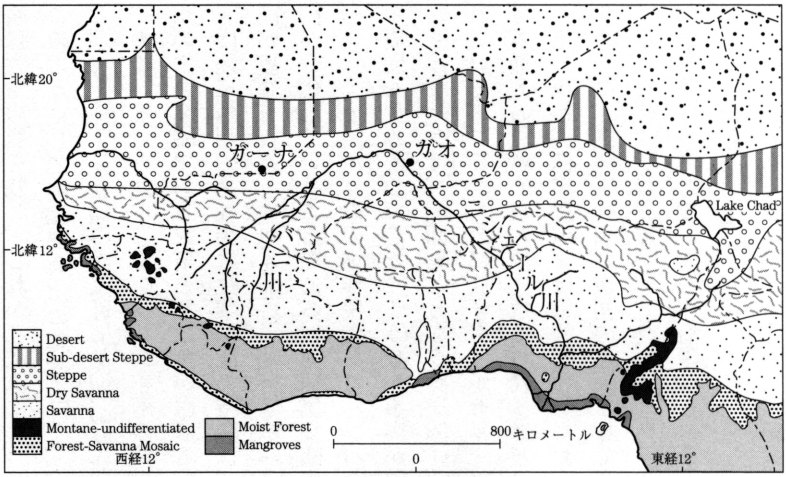

図1　西アフリカの気候図とニジェール川

ることに示されている［Murdock 1959; Portères 1950; 中尾一九六六；Harlan 1982］。この地で栽培化されたのは、穀物として、グラベリマ稲、トージンビエ、ソルガム、フォニオなどであり、ほかにゴマやカリテなどの油化植物、バンバラ・ビーンズやササゲなどのマメ科、オクラやヒョウタンなどの果菜類である。(7) 豊かな西アフリカのサバンナのなかでも、この内陸三角州は特に生態資源に恵まれており、この地で栽培化されたグラベリマ稲の栽培のほかに、漁業、牧畜、畑作などの多様な生業システムの発展を見た。それに基づいて、この地では古くから手工業の発展と人口の増大が実現されてきたのである。

内陸三角州では自然氾濫を利用した稲作が古くから行われており、それを単独に栽培し、あるいは畑作と組み合わせることで、安定した収量が確保された。また、この稲の茎やイネ科の雑草は牛や羊の飼料となるものであり、これらの家畜の成長と再生産に大きく貢献してきた。内陸三角州が生み出すこれらの飼料は、その外部の土地が乾燥のピークを迎える十二月以降に利用可能となるので、牧畜にとってはとりわけ効果的なものであった。しかも、内陸三角州で飼育された家

畜は大量の糞を残し、これが氾濫水によって溶解することで水を富栄養化し、それによって魚が成長してきた。[8] このようにして内陸三角州の諸社会は（このことは、強度は劣るが西アフリカのサバンナ地帯に共通するものである）、さまざまな生態学的条件と人間の諸活動を有機的に組み合わせることで豊かな生活を築いてきたのである。そのことは、一九六〇年のマリ共和国の独立以来の数年間、マリの全輸出品目中の第二位と第四位を、内陸三角州の主要産品である家畜と加工魚が占めていたことが示すとおりである[9]［竹沢　一九八九：八七三］。

内陸三角州の諸社会の生業形態の特徴は、エヴァンズ＝プリチャードが『ヌアー族』で描いたように、同一集団が農業と牧畜と漁業を並行して行うのではなく［エヴァンズ＝プリチャード　一九七八］、生業によって社会集団が分化していることである。漁猟民集団であるボゾ、牧畜民のフルベ、米作民であるマルカやリマイベ、トージンビエやソルガムの畑作民であるバンバラとドゴンというように、生業の違いが言語も行動様式も文化も異なる集団を生み出してきた。[10] こうした事実が内陸三角州の文化的多様性を生み出してきたのであり、なかでもドゴンとバンバラは、仮面をともなう葬送儀礼や、豊かな神話をもつイニシエーション結社の存在によってよく知られている。フランスの民族学者マルセル・グリオールらによるその宗教システムの研究は、世界の人類学史における最大の貢献のひとつに数えられるほどのものである［グリオール　一九八一］。

そのほか、漁業民ボゾは宗教的特徴においては乏しいが、「穴から出てきた」という起源伝承をもつことが示すように、内陸三角州の最初の住人として自他ともに認めており、伝承や民話などの口承文芸の豊かさをもっている［竹沢　一九九九b］。一方、マルカは安定した米作によって得られる余剰と時間を商業ネットワークの建設に振り分けることで、大西洋沿岸からベヌエ川・チャド湖にいたる、西アフリカ全体を結び合わせる商業ネットワークを建設してきた［竹沢　一九八八：坂井　二〇〇三］。さらに牧畜民フルベは、この地方の富の主要形式である牛の飼育を行うほか、特に十八世紀以降ジハードを宣言して、西アフリカ各地のイスラーム国家の建設に貢

献してきた［Ba et Daget 1984］。

このようにサバンナの生態資源の豊かさは――ここで豊かさというのは、栽培種や飼育家畜などの種の多様性であり、それがもたらす生産力の高さである――、文化的多様性を、いいかえるなら文化的象徴化作用の豊かさを実現してきたのである。テラコッタ像が発見されているのもこのサバンナ地帯に限られており、ノクのテラコッタ像がBC五世紀頃に始まるとされていることを見ても、この地帯の文化的象徴化作用の豊かさが古くから実現されてきたことは確実である。

二　サヘルの生態資源の貧困と政治的象徴化の進展

サハラ砂漠の南縁地帯をサヘルという。アフリカの東海岸をスワヒリと呼ぶのとおなじで「岸辺」、すなわちサハラという砂の海の岸辺を意味することばである。サヘルの年間降水量は三〇〇～五〇〇ミリメートル程度と少なく、そのため水の集まる低地で乾燥に強いトージンビエの栽培がようやく可能なほかは、マメ科の栽培も果菜類の栽培も見られない。井戸は一般に五十～七十メートルと深く、移動しながら乏しい草を食べさせる牛や羊、ラクダの遊牧が主要な生業である。年間を通じて降水量の変動が少ないため、生態資源の多様性と絶対量に乏しく、農業や牧畜の生産力も低いので、人口も少ない。そうした生態資源の乏しさに比例するかたちで、この地帯の文化的象徴化作用もあまり豊かではない。秘密結社や複雑な仮面儀礼の存在はこれまで報告されたことがないし、過去の国家建設につながる歴史伝承を除けば、口頭伝承も一般に豊かでない。また、テラコッタ像が発見されていないことが示唆するように、文化的象徴化作用の乏しさはおそらく過去からつづいてきた事実である。

ところが奇妙なことに、西アフリカで最初に国家の存在が確認されているのはこのサヘル地帯なのである。西アフリカに言及した最初のアラビア語史料である八世紀半ばのアル・ファザーリー（al-Fazārī）や九世紀のアル・クワーリズミー（al-Khuwārizmī）は、西アフリカのサヘル地帯に、ザガワ（Zaghawa）とガーナ（Ghana）とガオ（Gao、しばしばKawkawと呼ばれる）の三つの王国が存在するとしている[11]［Cuoq 1975: 42, 44］。その後、西アフリカの北西部に位置し、当時としては世界最大級の金の産出地を後背地としてもっていたガーナ王国は、九世紀から十二世紀にかけて西アフリカで最も有力な国家でありつづけた。たとえば、アル・イドリシ（al-Idrisi）は一一五四年につぎのように書いている。

> ガーナは川の両側に建設された二つの都市からなっている。それはスーダーン（アラビア語で「黒人の国」の意）で最も広く、最も人口が多く、最も商業的な都市である。そこにはマグレブのさまざまな国や、その近くの国々から巡回商人がやってくる。この国の住人はムスリムである。……王はナイル川[12]のほとりに、ていねいに造られた立派な王宮をもっている。その内部はさまざまな彫刻や絵画、ガラス製品で飾られている。この王宮の建設はイスラーム暦の五一〇年（一一一六～一一一七年）のことである。この王国の領土はワンカラ国の領土につづいている。ガーナの国は金の国であり、その量の多さと質の高さでよく知られている［Cuoq 1975: 133、カッコ内は竹沢］。

一方、ガーナの東七〇〇キロメートルに位置するガオは、サハラ砂漠各地に残る岩壁画をつなぐことで確認される「戦車の道」（これは西暦紀元前一〇〇〇年頃から存在していたと考えられる）がニジェール川にぶつかる地点であるなど［Lhote 1958］、太古から北アフリカと西アフリカを結ぶ交易路の終点であった。またそれは有史時代

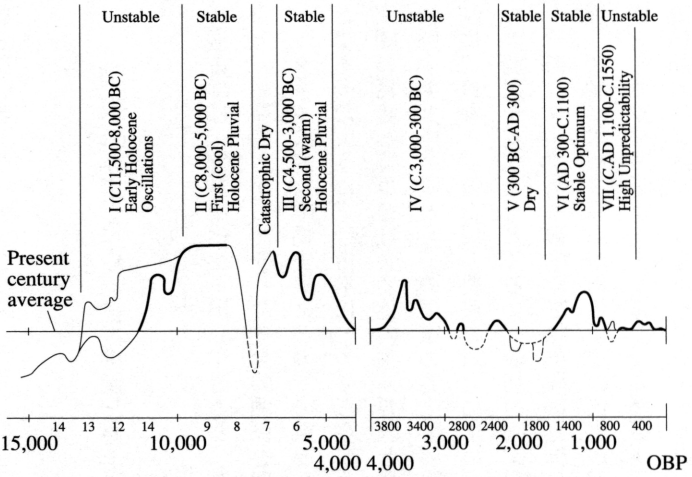

図2　過去1万5000年の西北アフリカの気候変動（基準線が現在の平均値、上が湿潤）［McIntosh 1998］

になっても、アラビア語史料においてつねにその王国の存在が確認されるなど、西アフリカ全土でも一、二の重要性をもつ都市であった。ガーナ王国が乾燥化によって十二世紀以降滅亡したのに対し、ニジェール川の豊かな水量によって支えられたガオはその後も繁栄を維持した。なかでも十五〜十六世紀には、西アフリカ史上最大の版図をもつ国家、ガオ帝国を建設するにいたったのである。

こうしたサヘルの諸国家に対し、サバンナ地帯での国家の成立はきわめて遅かった。サバンナにおける諸国家の成立は、十三〜十五世紀に最盛期を迎えたマリ帝国を除けば、ようやく十七世紀になってであった。大西洋沿岸で奴隷貿易が盛んになったために経済の重点がサヘルから南のサバンナや森林地帯に移ったこと、奴隷狩りを容易にするために鉄砲などの武器が導入されたため、その入手に容易な沿岸地方に諸国家が建設されたこと、などがその主要因であった。サバンナ地帯の最初の国家であるマリ帝国にしても、その絶頂期である十三〜十五世紀は歴史的に見て最も乾燥した時期であり、サバンナというよりサヘル的な気候帯に属していた可能性は高い（図2）。かくして西アフリカの

古王国は、生態資源の豊かなサバンナ地帯ではなく、それの乏しいサヘル地帯で成立し、その覇権がサバンナ地帯を広く覆っていたのである。

三　国家の発生をめぐる議論と考古学

考古学は、物質文化から出発すること、農業や牧畜をはじめ、手工業、交易などの生産諸力の発展を重視すること、生産諸力から出発して社会的関係を理解しようとすることなどの点で、唯物史観と親縁性をもっている。マルクス主義的な唯物史観にとっての重要な課題のひとつが、国家を揚棄するために国家の発生過程を論じることであったように、考古学にとっても主要な関心のひとつは国家の発生過程を明らかにすることにある。社会集団間の葛藤と闘争を社会変化の主要要因と見なすマルクス主義は、私有財産制と奴隷制による階級の出現が、階級闘争の抑圧装置としての国家の発生を要請したと解釈した［エンゲルス　一九六五］。一方、社会的対立を奴隷制にではなく、牧畜民と農民の対立に求めたのがオッペンハイマーであった。移動と武力に富む牧畜民が「鈍重な」農民を支配したところに、最初の国家が成立したと考えたのである［オッペンハイマー　一九七七］。

一方、マルクス主義的な唯物史観に立脚しない研究者は、国家の発生を集団間の対立ではなく、生産諸力の管理と統制に求める傾向がある。その代表が、潅漑施設のコントロールとそのための集団間の調停を国家発生の基礎としたウィットフォーゲルの水利国家論であった［ウィットフォーゲル　一九九一］。また、長距離交易による奢侈品のコントロールを国家成立のメルクマールとするポランニーやコクリー＝ヴィドロヴィッチらの議論［ポランニー　一九八〇；Polany 1957; Coquery-Vidrovitch 1969］、くり返される神殿建設における人員と観念の動員

を重視するわが国のアンデス研究も［関　二〇〇六］、基本的にはおなじ視点に立っている。[13]

これらの解釈を踏まえた上で、私たちの眼を「中世」の西アフリカに向けることにしよう。生態資源の豊かさに恵まれたサバンナの諸社会は、古くからきわめて高度な生産力を実現していたことが明らかにされている。内陸三角州南部のジャやジェンネの遺跡からは、紀元前五〜三世紀頃から、栽培化された稲と、牛および羊／山羊の骨、大量の魚の骨、鉄とスラグが出土している。鉄の原料は内陸三角州には存在しないので、これはその外部からもたらされていたはずであり、数百キロメートル離れた地点を結ぶ地域内交易が盛んであったことの証拠となっている［McIntosh and McIntosh 1980; Bedeau et al. 2006］。

こうした産業の多様化によって、地域内人口も増大したはずである。実際、ジェンネ近郊のジェノ遺跡は、AD四〜八世紀には人口一万を超える現在のジェンネとおなじだけの広がりをもっていたことが確認されている。また、その周囲には、漁業、鍛冶、土器作り、織物などに特化した衛星集落をともなっていたことも確実とされる[14]［McIntosh and McIntosh 1980］。このように人口の集中と職業分化を実現した、直径一キロメートルを超える巨大遺跡は、内陸三角州とその周辺地域に十以上存在しており［Raimbeault et Sanogo 1991］、サバンナ地帯の生産力の高さを裏づけている。

しかし奇妙なことに、内陸三角州およびその周辺地域からは、国家ないし高度な社会的成層化の痕跡はどこにも確認されていない。マッキントッシュらの二十年にわたる発掘によっても、ジェノ遺跡からは、社会的成層化のメルクマールとなりうる大規模な建造物は発見されておらず、ジャの発掘においてもおなじである［Bedeau et al. 2006］。こうしたことから、ジェンネ・ジェノ遺跡で長年にわたって発掘に従事したロデリク・マッキントッシュは、サバンナ地帯では平準化メカニズムが強く働いていたために社会の成層化が実現されなかったとして、これを西アフリカのサバンナ地帯の社会の固有の特徴と考えている［McIntosh 1998］。これを私たちの問題意識

に近づけるなら、サバンナ地帯の社会では、職業分化や農耕の発展が可能にした余剰生産は平準化メカニズムを備えた文化的象徴化作用に振り向けられていたため、[15]高度な社会的成層化に結びつかなかったということになるであろう。

これと対照的なのがサヘル地帯である。一般にサヘル地帯の遺跡は規模が小さく、個々の遺跡の深度も浅く、直径が一キロメートルを超える遺跡はほぼ皆無である［Raimbeault et Sanogo 1991］。また、これまで衛星集落が確認されたこともないし、遺跡の数そのものがサバンナ地帯に比べていちじるしく限られている。ところがこのサヘル地帯でこそ、中世のアラブ史料が明らかにしているように、遅くともAD八世紀には複数の国家が成立していたのである。そしてそのことは、サヘル各地で行った私たちの考古学調査が裏づけてきたものでもあった。

四　私たちの考古学調査の成果

1　ガオ・サネ遺跡での成果

私たちの考古学調査は、一九八八年以来サヘル地帯の数ヵ所で行われた。[16]私たちがサバンナではなくサヘルを選んだのは、以下の理由による。これまで西アフリカのサバンナ地帯では新石器時代の遺跡が確認されていないこと、それゆえ農業の起源や鉄製造の起源をはじめ、国家の発生にいたる考古学の主要テーマを論ずるには、サヘル地帯での発掘が必要と判断したことである。このうち、二〇〇二年、二〇〇四年、二〇〇六年の発掘は、マリ共和国東部のガオ市およびその近郊で実施された。ガオは、先史時代からつづく「戦車の道」の終点であるこ

と、アラビア語文献でくり返し言及されるほどの重要性をもっていること、それに比較してこれまでほとんど考古学発掘が行われていないことが、この地で発掘を行った理由である。

最初に紹介するのは、二〇〇二年にガオ市近郊のガオ・サネ遺跡で行った発掘の成果である。これはガオ市の東部七キロメートルのところにある遺跡であり、東西に約四〇〇メートル、南北に約六〇〇メートルの小高いマウンドをもつ遺跡である。その北側にはアラビア語の碑文をもつイスラーム墓地があり、それはAD一〇八八年から一二六五年まで使われていたことが確認されている［Flight 1975; Moraes Farias 1990］。この遺跡はガラス製ビーズが大量に出土するために徹底的な盗掘の対象となっており（推計では二〇〇〇以上の盗掘穴が存在する）、私たちとしても発掘可能な箇所を見つけるのが困難であった。ようやく中央の最も高い部分と、その北側の斜面に発掘可能な箇所を見つけ、それぞれ二×三メートルと、三×三メートルの発掘を並行して行った。

遺跡の北側の斜面の大半はゴミ捨て場として利用されていたらしく、発掘からは大量の土器やビーズの破片が発見された反面、建造物の痕跡は存在しなかった。これに対し、遺跡中央部の発掘からは、長方形の日干しレンガを用いた堅固な建造物が二層にわたって発見された。また、粘土で作った小さな仕切りがあったが、その内部には風化した米が大量に存在し、穀物倉として利用されていたことがわかった。その他、二つの発掘からは、綿糸の製造に用いられたと思われる紡錘車に加え、五〇〇点を超える銅、ガラス、鉄、土器製のビーズが発見された。また、この二つの発掘からは大量の瓶型土器が出土しているが（全体の約四十五%）、これまで西アフリカにおける発掘からは瓶型土器はほとんど出土しておらず、この点はきわめて興味深いものである。放射性炭素の分析からは、AD八〜十世紀という数字が得られている。一方、遺跡の北側には十一〜十三世紀の碑文をもつ墓碑があるので［Moraes Farias 1990］、この遺跡の全体は八〜十三世紀と考えるのが適切であろう。

これまで西アフリカで発掘された最古の長方形の日干しレンガはAD十三世紀以降であり、八〜十世紀と見ら

れる地層から発見されたことは注目される。その他、これまで西アフリカで発見されたなかでは最古の紡錘車が出土したこと、ガラス製ビーズのいくつかは製造途中のものであり、ガラスの溶解に用いられたと思われる小型のるつぼが三十個ほど発見されたこと、きわめて特徴ある形態をした銅の小板が大量に出ていること、サバンナにはほとんど見られない瓶型土器が出土していることなども、他の遺跡と比較したときのこの遺跡の際立った特徴である。

サバンナに位置するジェノ遺跡では、粘土を丸めて固めた日干しレンガが十二世紀まで用いられていたとされており、瓶型土器は存在せず、ガラスや銅製品のような長距離交易の痕跡もほとんど存在しない［McIntosh & McIntosh 1980］。これらのことは、サヘルに位置するこの遺跡とのあいだの文化的断絶を示すものである。これほどの文化的断絶の存在は、地域的差異や社会的成層化の度合いの違いに帰することは困難である。この遺跡の住人は熱帯アフリカの黒人系ではなく、北アフリカからの交易者＝手工業者であったと考えた方が、より蓋然性は高いであろう。

もしこの解釈が正確であるとすれば、AD八～十世紀という早い時期に、西アフリカのサハラ以南の土地に北アフリカ住人のコロニーが建設されていたことになる。これまでの有力な説によれば、西アフリカと北アフリカの交易路が活発化したのは、北アフリカでイスラーム化が定着し、安定した社会的制度をつくり出した西暦八世紀以降、とりわけ九～十世紀以降と考えられている［Devisse 1972; Hunwick 1999: xxxiv］。これに対し、八世紀にすでにガオ近辺に北アフリカ住人のコロニーが成立していたとすれば、イスラーム化が北アフリカに根づく以前に、サハラ縦断交易はかなりの頻度をもって行われていたことになる。以上の点で、このガオ・サネでの発掘の成果は、サハラ縦断交易についての従来の理解を大きく変える可能性をもっている。

写真2　ガオ遺跡の発掘現場（2004年撮影）

2　ガオ市内での発掘の成果

一方、二〇〇四年、二〇〇六年の発掘はガオ市内で行われた。ガオ市には、十五世紀の王アスキア・ムハンマドが建設したという巨大なピラミッド状の建造物があり、これは今日まで残って、二〇〇五年に世界遺産に登録されている。ガオの建設はそれより古く、たとえば一三二四年にマリ帝国最盛期の王カンカン・ムーサがメッカ巡礼をした帰途に立ち寄り、モスクを建設したという記録と口頭伝承が存在する［Es-Sa'di 1981: 14］。そのため、ガオの旧市街地にはカンカン・ムーサのモスク跡とされる、約二〇〇メートル四方の土地が空き地のまま今日まで残されている。そこで、私たちはこの空間を新たな発掘地として選択した。

この土地の表面を広い範囲にわたって清掃し、注意深く観察していったところ、建物の基礎石と思われる石が数列にわたって存在していることを確認した。そのうちの一ヵ所、平たい石が平行に並んでいる箇所で発掘を開始したところ、その結果は私たちの予想もしないもので

あった。私たちが掘り出したのは、東翼三十七・五メートル、奥行き十五メートルという巨大な総石造りの建造物であった（西側には現在建造物が建っており、発掘は不可能である）。

この建造物は丸い石と平たい石を組み合わせて作られており（写真2）、内部にいくつもの小部屋が設けられているので、モスクではないことは確実である。入り口の部分は、サハラ以南では希少な焼きレンガで装飾されており、石作りの壁の幅は一般に一メートル程度で、最も厚いところで一・二メートルある。今日建てられている家は、日干しレンガを用いた壁の厚さが約四十センチメートルのものなので、この建造物は石造りであることを考慮すれば、その五倍から十倍の強度をもっていたはずである。今日の建物が三メートルの高さをもっていることを考えるなら、十メートルを優に超える高さの建造物であったと推測することができる。

日干しレンガを用いた建造物のうち、西アフリカに存在する最大のものはジェンネのモスクであり、両翼七十五メートル、高さが十二メートルある。おそらくそれと同等の規模をもつ、これまでに西アフリカに存在した最大級の建造物であったであろう。石がどこから運ばれてきたのかはいまだ確認されていないが、ガオ市近辺にはこの種の石が存在しないところから、遠方から舟ないし家畜を用いて搬出されていたことは疑いない。

この建造物内外の出土品としては、北アフリカないし中東産と思われるガラス製容器や磁器片、七〇〇〇点を超える輝石やガラス製のビーズが見つかっており、サハラ砂漠を越えてラクダの背でガラス製容器が運ばれていたとすれば、これも比類のない富と権力の存在を示唆するものである（写真3）。また、銅の装飾品が十数点見つかったほか（写真4）、鉄に銅の象嵌をはめ込んだ鉄製の刀が発見されている。土器についていえば、ガオ・サネ遺跡に特徴的な、表側と裏側に溝を入れた土器や黄土色の彩色を施した土器が見つかったほか、マッキントッシュによってチャイナと名づけられた赤茶色の厚い釉薬を施した土器、さらに内陸三角州北側の湖地方に特有とされる黒色の土器が出土している。ガオと内陸三角州は六〇〇キロメートル以上離れているので、ガオがニジ

ェール川を媒介とした広域的な交易の中心地であったことは疑いない。

一方、ガオ・サネ遺跡の出土品と比較すると、かなりの差異があることが確認される。ガオ・サネ遺跡の土器の特徴である瓶型土器の出土が限られていること、ガオ・サネ遺跡にはない銅の装飾品は存在するが、銅の貨幣

写真3　ガオ遺跡から出土したガラス製容器（9～10世紀のものと推測される）

写真4　ガオ遺跡から出土した銅製品。服飾品？

であったと思われる銅片の出土が少ないこと、鉄製品は存在するがスラグが存在しないことなどである。その反面、土器の形状には親縁性が存在することから、この建造物が建設されたのはガオ・サネ遺跡とほぼ同時代であるが、二つの遺跡を占めていたのは、文化的か社会階層的に異なる二つの集団であったと推測される。前者の場合には、ガオ遺跡の住人は黒人系、ガオ・サネ遺跡は北アフリカ系という違いであり、後者の場合には、ガオ遺跡の王ないし政治権力者に対するガオ・サネ遺跡のイスラーム交易者＝手工業者という違いである。

十～十一世紀のアラブ史料は、ガオには二つの都市があり、東側の都市にはイスラーム交易者が住み、西側の都市には現地の王が居住するとしている。たとえば九九〇年のアル・ムハラッビー（al-Muhallabi）の記録は、つぎのように書いている。

> ガオは黒人の国であり、都市の名前である。この国の王はイスラーム教徒であると称し、住民の大半もそうである。川の東側に王はサルナート（おそらくサネをさす）という都市をもっている。これは商人の都市である。各地からそこに商人がやってくる。川の西側に王は別の都市をもっており、そこには彼とその兵士、信頼する人びとが住んでいる。そこにはモスクもある。これら二つの都市のあいだに、金曜日の礼拝のための土地がある［Cuoq 1975: 77］。

さらに一〇六八年のアル・バクリー（al-Bakri）の書も、ガオには二つの都市があり、一方は王とその臣下の住む王都であり、他方はイスラーム交易都市であると言明している［Cuoq 1975: 108-109］。こうしたアラブ史料による二重都市の存在は、私たちの発掘によって確認されたといえるであろう。なお、この建造物の建設時期についていえば、全体の発掘が完了していないので放射性炭素の分析は行っていない。しかし、出土した磁器のい

くつかは、北アフリカに十〜十二世紀に栄えたファーティマ朝[17]（あるいはそれ以前）のものである可能性がきわめて高く、ガラス製容器については、九〜十世紀のイスラーム・ガラスであると考えられている[18]。また、この遺跡から出土する土器がガオ・サネ遺跡のそれと共通性が高いところを見ても、ほぼ同時代の、十世紀前後の建造物と考えて大きな間違いはあるまい。

西アフリカのサバンナ地帯で、これほど古い時期に、しかも石造りの大規模建造物が発見されたことはこれまで報告されておらず、その意味でも今回の発見はきわめて大きな意味をもっている。ガオ市付近には存在しない石を用いて建造物が建設されていること、建造物の規模が並外れて大きいこと、ガラス製容器や磁器片、銅や鉄製の装飾品、大量のガラスや輝石のビーズといった高価な輸入品が出土していることなどは、強大な権力の存在を示唆するものである。そこから私たちはこれが過去の王宮であったと解釈している。西アフリカ考古学はいまだ「中世」以前の王宮を発掘したことがないので、もし私たちの解釈が正しいとすれば、今回の発見は「中世」西アフリカの王宮の初めての発掘ということになる。これは今後、西アフリカ考古学の最大の成果のひとつに数えられるはずのものである。

五　サヘル／サバンナ——「中世」西アフリカの国家建設に関する解釈

以上の発掘成果を踏まえて、私が本稿で考えたいのはつぎの点である。生態資源の豊かなサバンナ地帯では国家が発達せず、逆に生態資源の乏しいサヘル地帯で国家ないしそれに準ずる社会的階層化が生じたのはなぜか、ということである。それはいいかえるなら、サバンナ地帯の諸社会がもっていたと思われる強力な平準化メカニ

ズムを、なぜサヘルの諸社会はもたなかったのか、という問いである。

サバンナ地帯に位置するジェンネやジャでの発掘と、私たちが行ったガオ・サネおよびガオ市内の発掘を比較するとき、最大の違いは長距離交易に結びつく出土品の多寡である。マッキントッシュらは数十年にわたってジェンネ近辺で発掘を行っているが、発掘からは数点のガラス製ビーズしか発見されておらず、西アフリカで希少な銅製品の出土もきわめて限られている。一方、私たちのガオ・サネ遺跡の調査では、二ヵ所あわせて十五平方メートルの発掘から五〇〇点を超えるガラス製や銅製、土器製のビーズを発見しており、これは西アフリカ考古学としては例外的な多さである。さらにガオ市内の発掘では、七〇〇〇点を超えるガラス製や輝石製のビーズが出土しており、ほとんど前例を見ないほどの多さである。さらに、ガオ市の発掘で発見されたガラス製容器はこれまで西アフリカでは報告されたことがないものであり、磁器片の発見もガオ市を含めたサハラおよびサヘルの遺跡から数点報告されているだけである［Berthier 1997; Insoll 1997］。以上のことから、サバンナ地帯とサヘル地帯とでは、生態資源の豊かさの違いとともに、長距離交易の影響が圧倒的に違っていることが確実である。

長距離交易と国家の発生との関連性は、先にも述べたように、これまで考古学や歴史学でしばしば論じられてきた。しかしながら、これらの議論は長距離交易と国家の発生の相関性を論じているだけで、両者のあいだの関係性を論理的に説明するにはいたっていない。国家ないしそれに準ずる社会的成層化の出現と、長距離交易の存在の、いずれが時代的・論理的に先行するかさえ明らかにされてはいないのである。

私としては、「中世」西アフリカにおける国家建設のプロセスについて、生態学的条件と長距離交易の存在を手がかりにして、つぎのように考えている。サヘル地帯の諸社会は、最初に見たように生態資源に恵まれておらず、そのため希少な資源をめぐってコンフリクトが生じやすい状況にあったであろう。このことは、生態資源に恵まれたサバンナ地帯の諸社会では、資源の獲得をめぐるコンフリクトが発生する必要が存在せず、平準化メカ

ニズムが十分に機能していたと思われることと対照的である。

サバンナ地帯では、豊かな生態資源を宗教儀礼などの文化的象徴化作用に振り当てており、そのことで経済的・社会的格差の出現を予防していたと同時に、長距離交易の産品に対する需要も少なかったであろう。とりわけドゴン社会に代表されるような仮面儀礼が盛んに行われた社会では、人びとの価値は鮮やかな造形をもつ仮面や彫像に向けられていたため、長距離交易によるビーズやガラス製品が導入されたときにも、その影響は限られていたと思われる。これに対し、資源をめぐるコンフリクトが生じやすかったと同時に、文化的象徴化作用の乏しかったサヘル地帯の諸社会では、長距離交易がもたらすガラス製品などの産品はただちに重要な富として迎えられ、それをめぐるコンフリクトを生じさせたのではなかったか。

西アフリカの経済史が示しているのは、ポランニーの「交易港」の概念が示すような、交換経済と贈与経済の二重性である［ポランニー　一九八〇］。それによれば、社会文化システムのなかに埋め込まれた贈与経済が平準化メカニズムに結びつく一方で、交換経済の導入はそれを破壊する可能性をもっていた。そのため、伝統的な権威に基礎をおく地域的な権力ないし社会統合メカニズムは、交易拠点を村落の外部におくのが一般的であった。「交易港」の概念が示すのはそれであるが、サバンナの諸都市でも、ジェンネは外部の交易者を町のなかに入れることなく、東側の丘にとどめおいたとされている［McIntosh & McIntosh 1981: 21］。アラブ史料が伝える交易都市と王都の二重性は、先に見たように、ガオのみならずガーナ王国についても言及されており、外部社会との交易の影響が社会が有する内的な権威構造や統合メカニズムを破壊させないための配慮は、このようなかたちで広く存在していたと思われるのである。

村落の内部に立ち入ることを禁じられていた外部の交易者と、平準化メカニズムをもつ村落社会とを結ぶ仲介者として機能していたのが、マンデ諸社会[19]で一般にジャティギ（jan tigi：直接的には「屋敷の主」の意）と呼ばれ

る一種のブローカーであった［Perinbam 1980］。これは一般に、伝統的な宗教的権威と集団的合意によって支えられる首長や長老とは別の、若くて能力のある存在がなる職務であった。このような二重性を採用することで、村落社会は外部からやってくる物質的およびイデオロギー的な影響がその内部に及ぶことを最小限度に食い止める一方で、長距離交易がもたらす富の享受を可能にしていたのであろう。

しかしながら、長距離交易がその社会的・経済的影響を増すにつれ、ジャティギと伝統的権威とのあいだの葛藤は増大していったはずである。この葛藤に、ジャティギと伝統的権威者のいずれが勝利を収めたかは明らかではない。しかし、この葛藤から、合意にもとづく伝統的な宗教的・政治的権威構造とは異質な、新たな権力構造が生じたことは十分に推測可能である。しかも、サハラを横断する長距離交易産品を入手しやすかった一方で、希少な生態学的資源をめぐるコンフリクトが生じやすい状態にあったサヘル地帯では、その調停のために強大な政治権力の出現がつねに要請されていたであろう。かくして、生態資源をめぐるコンフリクトと、長距離交易の産品をめぐるコンフリクトが複合したとき、「中世」西アフリカ諸国家の誕生が促されたのではないか。以上が、歴史的文献と民族学データ、および考古学発掘の成果を踏まえた、「中世」西アフリカにおける国家の成立に関する私の解釈である。

私たちの発掘は、二年の休止をおいて二〇〇六年より再開されている。建造物の全容を掘り出すこと、ガラス製品や磁器片、銅製品などの出土品のより詳細な分析を行うこと、出土品や放射性炭素分析による建造年代の明確化などが、本年度以降の課題である。これらの課題に応えていくことで、国家の発生をめぐる人類学的・考古学的課題に応えると同時に、西アフリカ史の書き直しに大きく貢献していきたい。それが私たちの調査研究がめざしているものである。

註

(1) 歴史的経過の異なる西アフリカに、ヨーロッパ史学などで作られた「中世」の概念を適用するのは正確ではないが、ここでは単に時間的な目安としてこの語を用いる。この語が指示するのは、西アフリカのサヘル地帯に諸王国が誕生したAD七世紀から一六世紀である。

(2) 私の最初の印刷論文のひとつは、西アフリカ原産のグラベリマ稲の栽培史の観点から、西アフリカの歴史を書き直そうとしたものであった［竹沢　一九八四］。

(3) これらの史料については、それぞれ詳細な註をつけて、仏訳および英訳が刊行されている［Cuoq 1975; Levtzion and Hopkins 1981］。

(4) 「中世」西アフリカの諸王国、とりわけガーナ王国やマリ帝国については多くの豊かな口頭伝承が存在し、それに基づいてしばしば歴史記述が行われてきた［Delafosse 1912; Niane 1960］。口頭伝承をアフリカの過去の再構成に用いることの可能性と諸問題については、一九七〇年代にいくつかの国際会議が組織されている［Fondation SCOA 1975, 1976］。私は別の箇所で、口頭伝承によって表出される歴史意識の特徴やその課題および困難について、くわしい検討を行っている［竹沢　一九九二］。

(5) わが国のアフリカ考古学がいかに未発達であるかは、熱帯アフリカを専門にする考古学研究者がひとりも存在しないという事実によって示されている。それに対し、近年のアフリカ史記述は、一九八二年から刊行されたケンブリッジの『アフリカ史』全八巻を見ても、考古学史料の十分な活用を欠いては不可能なのである。

(6) この時期に西アフリカでは、ガオ王国、マリ帝国、ガオ帝国などの巨大国家が成立し、西アフリカの多くの社会に今日までつづく大きな文化的・社会的影響を与えてきた。西アフリカの広い範囲が交易ネットワークで結ばれ、農業や手工業の同質性が生み出されたのはこの時期であった［竹沢　一九八八：坂井　二〇〇三］。また、西アフリカの多くの社会に、鍛冶屋、皮細工師、金銀加工師、木地屋、グリオなどのしばしば「カースト」と呼ばれる、他と通婚しない職業集団が存在するのもその影響のひとつである。こうした点で、この時期の西アフリカ諸社会の研究は、その後の奴隷貿易と植民地支配による破壊と殺戮が存在しなかったなら、熱帯アフリカにいかなる可能性

があったかを考える手がかりになるものである。

(7) 西アフリカはこのようにして独自の、しかも完成された農耕システムを実現させていたため、中東地域で栽培化された小麦、大麦などの品種が伝来したとき、それらをひとつも受け取る必要がなかった。そのことから、多くの研究者は、西アフリカでの農業システムの成立を紀元前五〇〇〇～四〇〇〇年と判断している［Murdock 1959; 中尾 一九六六］。ただ、西アフリカでこれまでに出土した穀物は、最古のものでBC二〇〇〇年頃であり、このズレを埋めていくことが今後の課題である。

(8) 一般にニジェール川は有機物に乏しいが、氾濫水によって表土と牛の糞が溶解するこの内陸三角州だけは例外であった。それはこの地を訪れたフランス人研究者が、「想像もできないほど多くの魚が存在する」と驚嘆したものであった［Blanc et al. 1955: 736］。

(9) その後、あいつぐ乾燥化とダムの建設によって漁獲量は激減したが、家畜およびその肉はあいかわらずマリの主要輸出品目のひとつでありつづけている。

(10) このような内陸三角州の諸集団の「棲み分け」については、植民地期最後の一九五〇年代に行われたフランスの地理学者ジャン・ガレーによる綿密な研究があり、いまだこれを越える水準のものは現れていない［Gallais 1967, 1984］。

(11) さらに詳細な説明が与えられるのは、九世紀末のアル・ヤクービー（al-Yakūbi）によってである。それはつぎのように書いて、サヘルの諸国家の重要性を指摘している。「つぎにガオ（Kawkaw）の王国がくる。スーダーンで、その威信と権力において最も重要なものである。全ての王国がそれに恭順しており、ガオはその首都の名である。しかもそのほかに多くの王が、独立を保ちながらも、ガオの王に恭順し、そのヘゲモニーを認めている。……つぎにガーナの王国がくる。この国には金の鉱山がある。この王国の権威の下に多くの王が存在し、なかでもAMとサマの王国がある。これら全ての国で金が産出する」［Cuoq 1975: 52］。

(12) ここではナイル川と書いてあるが、ニジェール川およびその支流の間違いである。中世のアラブの地誌家・歴史家は、長いあいだナイル川とニジェール川を混同しつづけた。ニジェール川がナイル川とは別の川で、西アフリカ

を西から東へと流れていることが確認されたのは、ようやく一七九五年にイギリス人探検家マンゴ・パークがこの地を訪れたことによってである。

(13) このなかでは、生態史観をとなえるカーネイロは、一定の生態環境のなかでの人口圧の増大を国家発生の要因として重視しており、これは国家の起源を、闘争にも統制にも置くことのできる見方である［Carneiro 1967］。

(14) 「中世」の内陸三角州にいかに人口が多かったかについては、時代は下るが、一七世紀にトンブクツーで書かれたアラビア語の史書がつぎのように書いている。「ジェンネの国は土地が豊かで、そこに住んでいる住人の数はずいぶん多い。ここには市がたくさんあり、いつもどこかで市が開かれている。この国には村が七〇七七あるという話で、それぞれが大変近い距離にある。これらの村々がどんなに近接しているかは、つぎのような話が示している。ジェンネの王がデボ湖付近の村にいる人間を呼びたいと思えば、その使いが砦の門のところに出かけていって、大声で用件を読み上げる。すると村から村へと伝えられて、ただちにこの男の耳に入り、この者は王のもとへ参上することになるのである」［Es-Sa'di 1981: 24-25］。

(15) 文化的成層化が、なぜ平準化メカニズムを備えているのか。それをドゴン社会の葬送儀礼について見ておこう。この社会では全ての畑は不均等に分割され、最も生産力のある畑を使用するのは村の最年長者であり、年齢順に豊かな畑を占めることになっている［Paulme 1940: 93-110］。一方、大規模な葬送儀礼を行うことは各拡大家族の名誉とされ、年長者をもつ拡大家族では、それに備えて長年にわたって富を蓄積していく。かくして仮面のダンスをともなう大規模な葬送儀礼は、蓄積された富の再分配の機会となるのであり、このようにして経済的不平等が社会的分化につながることを防止していると解釈されるのである［竹沢　一九八七］。

(16) これらの調査は、マリ文化省文化財保護局の故テレベ・トゴラ博士とママドゥ・シセ氏と共に行ったものである。なお、これらの調査を実施するにあたっては、以下の資金を得た。平成11―13年度文部省科学研究費補助金（基盤研究A「西アフリカ原産の稲作文化の歴史学的および社会人類学的研究」、代表竹沢尚一郎）、平成14―15年度文部省科学研究費補助金（基盤研究B「西アフリカ古王国の歴史人類学的研究」、代表竹沢尚一郎）。

(17) ファーティマ朝は西暦九〇九年に、現在のトリポリ付近のカイロワーンを本拠として成立した。のち、エジプト

に拠点を移して新首都カイロを建設し、その経済的重心は紅海での交易に移された。このような事情から、ガオとの交易が重要性をもったのは、とくに初期、十世紀頃のことであると思われる。

(18) 中東文化研究所の川床睦夫氏、進藤洋子氏に見ていただいている。いまだ分析中であり、最終的な鑑定の結果は出ていないが、深く感謝したい。

(19) マンデとは言語上の親縁性をもつ諸社会をさす名称であり、相互理解の可能なマリンケ—バンバラ—ジュラのいわゆる中核マンデを中心に、ソニンケとボゾの北マンデ、およびダンやグロなどの南マンデから構成される。全体の人口は二〇〇〇万を超えるほか、ソニンケはガーナ王国を、マリンケはマリ帝国を建国するなど、西アフリカの政治的・社会的発展に大きく貢献した。また、ガーナ王国の崩壊後、ソニンケ（地域によってマルカやヤルシと呼ばれる）は西アフリカ各地に散り、大西洋沿岸から現在のナイジェリアまでに広がる広大な交易ネットワークを建設し、これらの諸社会の経済的発展と文化的同質化の促進に貢献したことが知られている［竹沢　一九八七］。

参考文献

ウィットフォーゲル、K・A　一九九一　『オリエンタル・デスポティズム』（湯浅赳男訳）新評論。
エヴァンズ＝プリチャード、E・E　一九七八　『ヌアー族』（向井元子訳）岩波書店。
エンゲルス、F　一九六五　『家族・私有財産・国家の起源』（戸原四郎訳）岩波書店。
オッペンハイマー、F　一九七七（一九三〇）　『国家論』（廣島定吉訳）改造文庫、改造社。
グリオール、M　一九八一　『水の神』（坂井信三・竹沢尚一郎訳）せりか書房。
中尾佐助　一九六六　『栽培植物と農耕の起源』岩波新書、岩波書店。
坂井信三　二〇〇三　『イスラームと商業の歴史人類学—西アフリカの交易と知識のネットワーク』世界思想社。
関雄二　二〇〇六　『古代アンデス—権力の考古学』京都大学学術出版会。
竹沢尚一郎　一九八四　「西アフリカの米」『季刊人類学』一五—一、六六～一一六。
竹沢尚一郎　一九八七　『象徴と権力—儀礼の一般理論』勁草書房。

竹沢尚一郎　一九八八　「西アフリカのイスラム化にかんする一考察―歴史主義批判」『アフリカ研究』三二、一九～四三。
竹沢尚一郎　一九八九　「水の精霊とイスラム」『国立民族学博物館研究報告』一三―四、八五七～八九六。
竹沢尚一郎　一九九二　「神話から歴史へ」『宗教という技法』勁草書房、八五～一三三。
竹沢尚一郎　一九九七　「ボゾの歴史と社会」川田順造編『ニジェール川大湾曲部の自然と文化』東京大学出版会、二八三～三一一。
竹沢尚一郎　一九九九a　「ボゾとは誰のことか」『民族学研究』六四―二、二二三～二三五。
竹沢尚一郎　一九九九b　「物語世界と自然環境」鈴木正崇編著『大地と神々の共生』昭和堂、六〇～八三。
ポランニー、K　一九八〇　『人間の経済』一、二（玉野井芳郎・高野忠訳）岩波書店。
Ba, A. H. et J. Daget 1984 *L'Empire peul de Macina*. Mouton/ Les Nouvelles Editions Africaines.
Bedeau, Rogier, *et al.* 2006 "The Dia Archaeological Project: Rescuing Cultural Heritage in the Inner Niger Land (Mali)." *Antiquity* 75: 837-848.
Berthier, Sophie 1997 *Recherches archéologiques sur la capitale de l'Empire de Ghana*. B.A.R. International, Cambridge Monographs in African Archaeology, n. 41.
Blanc, M. *et al.* 1955 "L'exploitation des eaux douces dans le bassin du Moyen Niger." *Bulletin de l'IFAN*. série A 17 (4): 1157-1174.
Carneiro, Robert 1967 "A Theory of the Origin of the State." *Science* 169: 733-738.
Coquey-Vidrovitch, Catherine 1969 "Recherche sur un mode de production africain." *La Pensée* 144: 61-78.
Cuoq, Joseph M. (éd.) 1975 *Recueil des sources arabes concernant l'Afrique occidentale du VIIIe au XVIe siècle*. Ed. du CNRS.
Delafosse, Maurice 1912 *Le Haut-Sénégal-Niger*. Larose.
Devisse, Jean. 1972 "Routes de commerce et échanges en Afrique occidentale en relation avec la Méditerranée."

Revue Hist. Econ. et Soc., 1: 42-73, 2: 357-397.

Es-Sa'dī 1981 *Tarikh es-Soudan*, (trad. franc.). Maisonneuve.

Flight, Colin 1975 "Gao, 1972: First Interim Report, A Preliminary Investigation of the Cemetery at Sane." *Journal of West African Archaeology.*

Fondation SCOA 1975a *L'Empire du Mal.* Copedith.

Fondation SCOA 1975b *Actes du colloque.* Copedith.

Gallais, Jean 1967 *Le Delta intérieur du Niger.* Mémoire de l'IFAN, n. 79.

Gallais, Jean 1984 *Hommes du Sahel.* Flammarion.

Harlan, Jack R. 1982 "The Origins of Indigenous African Agriculture." *The Cambridge History of Africa* 1: 624-657.

Hunwick, John 1999 *Timbuktu and the Songhay Empire: Al-Sa'di's Tarikh al-Sudan down to 1613 and Other Contemporary Documents.* Brill.

Insoll, Timothy 1997 "Iron Age Gao: An Archaeological Contribution." *Journal of African History* 38 (1): 1-30.

Insoll, Timothy 2003 *The Archaeology of Islam in Sub-Saharan Africa.* Cambridge University Press.

Levtzion, N. & J. F.P. Hopkins (eds.) 1981 *Corpus of Early Arabic Sources for West African History.* Cambridge U. P.

Lhote, Henri 1958 *A la Decouverte des fresques du Tassili.* Arthaud.

McIntosh, Rderick. J. 1998 *The Peoples of the Middle Niger.* Routledge.

McIntosh, Suzan K. & Roderick J. McIntosh 1980 *Prehistoric Investigations in the Region of Jenne (Mali).* Cambridge Monographs in African Archaeology, n. 2, B.A.R.

McIntosh, J. Roderic, & Suzan K. McIntosh 1981 "The Inland Niger Delta before the Empire of Mali." *Journal of African History* 22 (1): 1-22.

Moraes Farias, Paulo F. de 1999 "The Oldest Extant Writing of West Africa." *Journal des Africanistes* 60 (2): 65-113.

Murdock, George P. 1959 *Africa: Its Peoples and Their Culture History*. McGraw-Hill.

Niane, D. T. 1960 *Soundiata ou l'Epopée Mandingue*. Presence africaine.

Paulme, Denise 1940 *Organisation sociale des Dogon*. Domat-Montchrestien.

Perinbam, B. Marie 1980 "The Julas in Western Sudanese History: Long-Distance Traders and Developers of Resources." In B.K. Swartz & R.E. Dumett (eds.), *West African Culture Dynamics: Archaeological and Historical Perspectives*, pp. 455-475. Mouton.

Polany, Karl 1957 *Trade and Markets in the Early Empire*. Free Press.

Porteres, Roland 1950 "Vieilles agricultures de l'Afrique intertropicale." *L'Agronomie tropicale* 5: 489-507.

Raimbeault, M. et K. Sanogo (éd.) 1991 *Recherches archéologiques au Mali*. Karthala.

Tarikh el-Fettach (trad. franç.), Maisonneuve, 1981.